

真理とは何か？——その五

慰める者

Jeff Pippenger

2023-09-11

七つの雷鳴のうちに開かれてきた預言的歴史は、私たちが今置かれている歴史を明らかにしている。その秘められた奥義は、それが表していた歴史が到来するまで隠されていた。今は、慰め主、すなわち「真理」の御霊が、ヨハネが「イエス・キリストの黙示」と呼んだ真理を明らかにする時である。というのも、イエス・キリストこそが真理だからである。それは単に「真理」という語が神のご性質を表すというだけのことではない。また、ヘブライ語の「真理」という語が聖書全体を通していかに深遠に用いられているかという、すばらしい言語学者の啓示にすぎるとも言えない。むしろ、それが理解されるとき、黙示録の預言を開く鍵となり、そうすることで聖書全体を開くことになるという驚くべき奇跡でもある。だがそれは、時が近いゆえに、そこに記された事柄を見、聞き、それを守ろうとする者にのみ与えられる。

人が「真理」を、それによって聖化されるようなかたちで認識するためには、聖霊の臨在が必要である。人は「真理」という言葉を知的に理解し、その意義に驚嘆することさえできる。しかし、「真理」は食する必要がある。それは内面化され、その人の経験の一部とされなければならない。というのも、その言葉は、キリストの御姿へと変えられることを求める者たちに、神の創造の力を運ぶからである。「真理」と訳されるヘブライ語について私が個人的に探究を始めるにあたり、出発点の一つとなったのはヘブライ語学者たちであった。彼らもまた、「真理」という語の驚くべき性質や聖書におけるその用法に言及している。しかし、彼らの「真理」という語に対する知的理解が、彼らをキリストへと導いたと信じる根拠はない。

「みことばは聖霊の臨在とともに食される必要がある」という預言的な事実は、十人の乙女のたとえにおける「油」に関するホワイト夫人の定義と響き合い、また、花婿を待つ乙女たちの二つの階級についての彼女の記述にも通じている。

象徴は多くの場合、複数の意味を持ち、その意味はその象徴が置かれている文脈によって定義されるべきである。それは、文法の専門家による語の定義や、その語が書かれた時代という歴史的枠組みによって定義されるべきではない。その二つの方法こそ、アドベンチズムの神学者たちが「真理」を否定するために用いてきたものである。象徴は、それが用いられている文脈によって定義される。預言の霊の中では、十人の乙女のたとえに出てくる「油」という語は、その「油」が見出される箇所の文脈に応じて、少なくともいくつかの異なる事柄を表している。なぜ一方の乙女たちは油を持ち、他方は持っていないのか。

不義と欺きと迷妄のうち、死の陰そのものの中に横たわっている世界がある—眠っている、眠っている。彼らを目覚めさせるために魂の産みの苦しみを覚えているのは誰か。どのような声なら彼らに届くのか。私の思いは、合図が与えられるあの未来の時へと運ばれる。「見よ、花婿が来られる。迎えに出なさい。」しかし、自分のともしびに

注ぎ足す油を求めるのを遅らせた者たちがいて、手遅れになってから、油が象徴する品性は人から人へ移すことのできないものだと知るだろう。その油とはキリストの義である。それは品性を表しており、品性は譲り渡すことができない。誰も他者のためにそれを確保することはできない。各人が自らのために、罪のあらゆる汚れから清められた品性を得なければならない。バイブル・エコー、1896年5月4日。

愚かな乙女たちは、間もなく来る危機を乗り切るのに必要な品性を備えていない。彼女たちはキリストの義を欠いている。しかし、油はまたメッセージでもあり、「終わりの時代」の十人の乙女のたとえにおける油は、聞き、読み、守るべきイエス・キリストの黙示によって表される最後の警告のメッセージである。

全地の主のそばに立つ受膏者たちは、かつてサタンに与えられていた守りのケルブとしての地位を持っている。御座を取り巻く聖なる存在たちを通して、主は地に住む者たちと絶えず交信を保っておられる。黄金の油は、神が信者のともしびを満たし続け、揺らいで消え去ることのないようにされる、その恵みを表している。もし神の御霊の告げることばにおいてこの聖なる油が天から注がれなければ、悪の諸勢力が人を完全に支配してしまうだろう。

私たちが神から送られるみ告げを受け取らないとき、神は辱められる。こうして、暗闇の中にいる者たちに伝えられるために、神が私たちの魂に注ぎ込もうとしておられる黄金の油を、私たちは拒んでしまう。「見よ、花婿が来る。出て行って彼を迎えよ」という呼びかけが来るとき、聖なる油を受け取らず、心にキリストの恵みを大切にしていなかった者たちは、愚かな乙女たちのように、自分たちが主をお迎えする備えができていないことに気づくであろう。彼らには、その油を得る力が自分自身の内にないので、彼らの人生は難破してしまう。しかし、もし神の聖霊を求め、モーセがそうしたように「あなたの栄光を私に見せてください」と嘆願するなら、神の愛は私たちの心に豊かに注がれる。黄金の管を通して、黄金の油が私たちに注がれるであろう。「権勢によらず、力によらず、ただわが霊によって」と万軍の主は言われる。義の太陽の輝く光線を受けて、神の子どもたちは世にあって光として輝く。Review and Herald, 1897年7月20日。

「油」は最後のメッセージであり、もう一度言えば、それはイエス・キリストの啓示である。この箇所では、油を持ちたいと願う者は、ホレブの洞窟でモーセがしたように、神に懇願しなければならない。しかし、もし私たちが「モーセがしたように懇願し」、神が私たちにその「栄光」を「示して」くださるよう求めるのであれば、まず慰め主である聖霊を求めなければならない。そうするなら、天使たちと二本の黄金の管を通して、私たちはキリストの義を受けることになる。ラオディキア的アドベンチズムの伝統や慣習がそうすべきだと示唆するように、同時にイエス・キリストの啓示のメッセージを拒みながら、キリストの品性を求めて祈り、嘆願できると思うなら、私たちは自分自身を欺いている。彼の義は、神の御座の前に立つ二人の油注がれた者たちによって伝えられる「神の御霊のメッセージ」を通して私たちに伝えられる。私たちが彼のメッセージを拒むとき、私たちは彼の義を拒むのである。

そこで私は答えて彼に言った、「燭台の右と左にある二本のオリーブの木は何ですか。」さらに私は答えて彼に言った、「二つの金の管を通して自らから黄金の油を注ぎ

出している二本のオリーブの枝は何ですか。」すると彼は私に答えて言った、「あなたはこれらが何であるかを知らないのか。」私は言った、「いいえ、わが主よ。」彼は言った、「これらは全地の主のそばに立つ二人の油注がれた者である。」ゼカリヤ書 4:11-14

『全地の主の前に立つ油注がれた二人』は、黙示録十一章の二人の証人としても表されている。

この二人の証人について、預言者はさらにこう宣言する。「これらは二本のオリーブの木、また、全地の主なる神の御前に立っている二つの燭台である。」詩篇記者は言った。「あなたのみことばは、わたしの足のともしび、わたしの道の光です。」黙示録 11:4; 詩篇 119:105. 二人の証人は、旧約聖書と新約聖書を象徴している。『大論争』 267.

ゼカリヤやヨハネによる二人の証人についての証言のいずれを考えるにせよ、どちらの証言の文脈も、ヨハネの黙示録1章1節でイエス・キリストの啓示のメッセージに関連して最初に言及されている真理、すなわち伝達の過程である。父から御子へ、御使いたちへ、預言者へ、そして教会へ。キリストが人類に語りかけるこの過程は、最終警告のメッセージの中でキリストが明らかにしようとしている重要な要点である。これは、第一の天使と第三の天使のメッセージの提示における強調点と一致している。

第一の天使のメッセージはウィリアム・ミラーによって体現されている。ミラーには、認識されるべきいくつかの預言的特質が備わっている。彼はその運動の「父」であり、アルファとオメガという観点から言えば、そこには「子」の存在が要請される。彼は「Millerite」という名で呼ばれる運動を代表しており、その語は岩石の一種の名称でもある。彼は、預言解釈に関する一連の聖書的規則を整備するために用いられた。そうした規則は、神の御霊のメッセージの伝達における主要な構成要素となった。そして、ミラーの世代の人々が、自らの愚かなラオデキア的狀態を保つのか、賢いフィラデルフィア人となるのかを選ぶ中で、そのメッセージは拒否されるか受け入れられるかのいずれかであった。第一の天使のメッセージの父として、彼は、第三の天使のメッセージを宣べ伝えることになる運動を典型的に示しており、また、その運動におけるメッセージの理解は、ミラーが第一の天使のメッセージを確立するために用いられたのと同様に、第三の天使のメッセージを堅固に確立する特別な聖書的預言解釈規則の一組によって導かれることになる。神は決して変わらない。イエス・キリストはきのうもきょうも、いつまでも同じである。

愛する兄弟たち、思い違いをしてはなりません。良い賜物も完全な賜物もみな上から来て、光の父から下って来ます。この方には移り変わりも、また回転の影もありません。ご自身の御心によって、真理のことばによって私たちを生み出されました。それは、私たちがご自身の被造物の初穂のようなものとなるためです。ヤコブ 1:16-18.

アドベンチズムの初めであれ終わりであれ、油で象徴される神の御霊のメッセージは、二人の証人を通して伝えられる。初めにミラー派のときは、二人の証人は旧約聖書と新約聖書であり、終わりには聖書と証の霊である。だからこそ、調査審判の最終局面における神の民の終末期の姿を最もよく示すヨハネは、パトモス島にいたのである。

私ヨハネは、あなたがたの兄弟であり、苦難における仲間、そしてイエス・キリストにある御国と忍耐にあずかる者として、神の言葉のため、またイエス・キリストの証のために、パトモスと呼ばれる島にいた。黙示録 1:9

パトモスという預言的な設定は、ヨハネが迫害されていることを示している。彼は、聖書と預言の霊を通してイエス・キリストの啓示を明らかにする神の御霊からのメッセージを受け取ったために、迫害されていた。

神の「終わりの日」の民に対する迫害は、黙示録11章において、二人の証人が通りで殺され、皆がその死を祝う場面にも表されている。11章では、その二人の証人はエリヤとモーセである。彼らは三年半のあいだ証しをし、その後には殺されたが、その後によみがえらされた。

すべての預言者は、自分たち自身の歴史についてよりも終わりの日についてのほうを多く語っている。ゆえに、終わりの日について語る書があるとすれば、それは聖書のすべての書が合流し、完結する『黙示録』である。したがって、終わりの日には、殺され、のちに復活する「メッセージ」が存在しなければならない。黙示録11章はフランス革命の歴史を描いているが、より直接的には、終わりの日における第三の天使のメッセージへの攻撃を描いている。ミラーのメッセージと運動によって予表されていたそのメッセージと運動は、その攻撃を受け、2020年7月18日に死んだ。黙示録11章によれば、その攻撃は底知れぬ穴から上って来る獣によって遂行されるであろう。

そして彼らはその証しを終えるとき、底知れぬ淵から上ってくる獣が彼らに戦いを挑み、彼らに打ち勝って、彼らを殺す。そして彼らの死体は大いなる都の大通りに横たえられる。その都は霊的にはソドムおよびエジプトと呼ばれ、そこでまた私たちの主も十字架につけられた。黙示録 11:8、9。

ホワイト姉妹は、「底なしの淵」はサタンの力の新たな顕現を表していると私たちに教えている。

「彼らはその証しを終えるとき [終えつつあるとき] .」二人の証人が荒布をまとうて預言する期間は1798年に終わった。彼らが隠れた働きの終わりに近づいたとき、「無底坑から上ってくる獣」と表される勢力によって、彼らに対して戦いが仕掛けられるはずであった。ヨーロッパの多くの国々では、教会と国家を支配する権力は、何世紀にもわたり、教皇制を通してサタンに支配されてきた。しかし、ここにはサタンの権力の新たな現れが示されている。大争闘、268。

黙示録には、底知れぬ淵から上ってくる三つの勢力が特定されている。最初に言及されるのは黙示録9章2節のイスラム教、第二は11章8節のフランス革命の無神論、第三は17章8節の現代ローマである。「新たな現れ」は終わりの時代において、ミラー派運動に代表される運動を攻撃するだけでなく、世界そのものも攻撃するもので、それは「Woke-ism」と呼ばれる、偽りの「真夜中の叫び」の偽りの覚醒である。Woke-ismは、現代のイエズス会の反キリストによって支えられ、商人たち、国際連合の政治指導者たち、アメリカ合衆国の墮落したプロテスタント諸教会におけるリベラル派の代表者たち、そしてRINOの共和党员と連携した民主党を通して推進されている。彼らは、11章で「ソドム」として表されている同性愛者コミュニティの逸脱した生活様式のあらゆる変種の推進を、自ら進

めるか、あるいはその推進を容認している。これら三つの勢力こそが世界をハルマゲドンへと導き、またそれらは無神論と世俗性の象徴である「エジプト」としても表されている。フランス革命の無政府状態という要素も、ホワイト夫人が「悪の連合」と呼ぶこれら三つの勢力を構成するもう一つの要素であり、その中においてWoke-ismは直接的に、あるいは容認という形で推進されている。Woke-ismは、十人の乙女の目覚めのサタンの偽物である。これらの論旨に沿ってさらに語るべきことはあるが、まずは2020年7月18日に実行された路上での殺人の余波を取り上げる必要がある。

また、親愛なる読者の皆さん、私が共和党を支持するつもりはまったくないことをどうか理解してください。私はいかなる政治的立場にも信頼を置いていません。私が指摘しているのは、単に、アメリカ合衆国、国際連合、そして教皇権に存在する預言的な力学です。1798年から日曜法に至るまで互いに並行する二本の角を直接取り上げ始めるとき、これらの力学についてはさらに具体的に扱うことになります。

悪魔的なウォーク主義は偽の「真夜中の叫び」を体現しており、本物の「真夜中の叫び」に先行する。そして本物の「真夜中の叫び」の時が来る前に、街路で殺された者たちは最終的に、愚かなおとめか賢いおとめのいずれかへとなる。私たちの品性が、滅びの火に定められた束か、天の穀倉に収められる束かのいずれかに束ねられる時期は、いまや到来している。

ホワイト夫人は、遅延の時に、ミラーライトの歴史における愚かな乙女たちが、賢い乙女たちとは異なる仕方で、その信仰を試す失望に反応したことを指摘しており、これによって遅延の時までに彼らの品性がすでに定まっていたことが示唆される。しかしエレミヤの証しは、私たちは神に立ち帰ることを選ぶことができ、私たちがそうするなら、神は私たちに立ち帰ってくださるだけでなく、続く危機において私たちに御自分の口として用いながら、悪しき者や恐るべき者に対して私たちに堅固な青銅の城壁としてくださることを教えている。まさにその預言的な時点において、イエスは私たちに慰めると約束しておられる。これが、私たちの現在の歴史の中に位置づけられているヨハネによる福音書の四つの章の意義である。

油は聖霊であり、品性であり、神の霊のことばでもある。神の霊は「慰め主」である。神がその独り子をお与えになったほどに世を愛されたように、また、イエスがご自身の神的あり方を犠牲にして、ご自身が創造された人性を永遠にご自身の一部として進んで受け入れたように、同じように、この時代に与えられている聖霊も、永遠に私たちと共にとどまるのである。

もしあなたがたがわたしを愛するなら、わたしの戒めを守りなさい。わたしは父に求めます。すると父は、いつまでもあなたがたと共にいるために、もう一人の助け主をあなたがたにお与えになります。すなわち真理の御霊です。この世はそれを見もせず、知りもしないので、受け入れることができません。しかし、あなたがたはそれを知っています。今それはあなたがたと共におり、やがてあなたがたのうちにおられるからです。わたしはあなたがたをみなしごにはしません。あなたがたのところに来ます。ヨハネの福音書 14:15-18

人類と永遠に共におられることを選ばれた聖霊のこの犠牲は、天の三者の他の二者の犠牲と呼応している。おそらく、贖われた者一人ひとりの内に永遠に住まわれることをいとわぬという聖霊の犠牲に匹敵するほど重要なのは、この特定の歴史における「慰め主」の到来が、神の民が永遠のために封印される時を示しているという点である。

また、神の聖霊を悲しませてはならない。あなたがたは、その聖霊によって、贖いの日まで証印を押されている。エフェソ人への手紙 4:30。

慰め主の約束が完全に成就する歴史、すなわち十四万四千人の歴史において、御霊は私たちのうちにとこしえにとどまる。福音の条件を満たしたすべてのキリスト者は聖霊を受け、それゆえ「贖いの日のために証印を押された」が、その証印は、いま進行しているこの歴史の中で十四万四千人が封印される時を指し示すにすぎない。エペソ人への手紙では、「贖いの日のために証印を押された」者たちは、「聖霊」を「悲しませる」者たちと対比されている。彼らは神の御霊からの語りかけを受け入れることを拒むことによって聖霊を悲しませ、その結果、黄金の油を拒むのである。失望のこの時期に、キリストが私たちに「慰め主」「真理の御霊」を遣わすと約束されるとき、それは私たちの上にご自分の印を置くとの約束であり、その印は、彼の戒め、ことに安息日の戒めを守ることを表している。これはヨハネが啓示を受けた日であり、いまや世界が直面しようとしている問題である。

賢い乙女たちの封印は、日曜法の試練の前に成し遂げられる。なぜなら、そこで賢い者も愚かな者も、その品性が現されるからであり、品性は危機において決して形成されるのではなく、単に現れるだけだからである。封印は、ほかのことのほかに、ラオデキヤ人の心からフィラデルフィア人の心への変容を表している。問題は、その変容が成し遂げられるためには、私たち一人ひとりにとっての第一の試験が、これまで自分がラオデキヤであったことを真に理解することにあるという点である。というのも、ラオデキヤである私たちの根本的な霊的態度は、実はすべてが全く間違っているのに、すべてが大丈夫だとするものだからである。その態度は退けられなければならない。それは、尊いものから分けられるべき卑しいものの一つである。

「神の民がその額に封印されるやいなや—それは目に見える印やしるしではなく、知的にも霊的にも真理に根ざし、もはや動かされない状態に達することを指すのだが—神の民が封印され、揺さぶりに備えが整ったとき、それはやって来る。実際、それはすでに始まっている。神の裁きが今、この地に下っており、何が来ようとしているのかを私たちが知ることができるよう、警告を与えている。」セブンスデー・アドベンチスト聖書注解、第4巻、1161。

失望の時に彼らを慰めるよう弟子たちに約束された『慰め主』は、神の民をあらゆる真理へと導き、そして私たちは『真理に確立される』ことを通して印を押される。神の民がこの時点で確立されるべき『真理』とは、『時は近い』がゆえに、恩恵期間が閉ざされる直前に封印が解かれる『真理』である。その真理とは、七つの雷の隠された歴史の構造であり、その隠された歴史は、イエス・キリストの黙示録が開かれる歴史を指し示す。七つの雷の隠された歴史は、その隠された歴史として表された『真理』の封印が解かれるまさにその時に成就する。その『真理』の封印が解かれることこそ、以前に封印されていたそのメッセージを受け入れる者たちに印を押すのである。

神の民は、日曜法の際に起こる怒れる諸国民の揺り動か先に先立って、その額に印を押される。これによって国家的破滅が始まる。イエス・キリストの啓示とは、『ヨハネの黙示録』の「この書の預言の言葉」のことであり、時が近いゆえに、もはや封じてはならない。私たちが祝福されるために、それは今や読み、聞き、何よりも守るべき真理である。

イスカリオテでないユダが彼に言った。「主よ、どうしてあなたはご自身を私たちに現そうとして、世には現されないのですか。」イエスは彼に答えられた。「もし人が私を愛するなら、私の言葉を守る。その人を私の父は愛し、私たちはその人のところに来て、その人とともに住む。私を愛さない者は、私の言葉を守らない。あなたがたが聞いている言葉は私のものではなく、私を遣わした父のものだ。私は、まだあなたがたとともにいる間に、これらのことを話した。しかし、助け主、すなわち聖霊は、父が私の名によってお遣わしになる方であり、その方がすべてのことをあなたがたに教え、また、私があるがたに語ったすべてのことを思い起こさせてくださる。」ヨハネによる福音書 14:22-26

封印が解かれつつあるそのメッセージを守る者たちに与えられている約束は、「慰め主」が、イエスが「あなたがた」に語られた「すべてのこと」を私たちに「教える」ということである。

これはエマオの弟子たちに、そしてその後、十一人の弟子たちにも成就した約束である。キリストが、エマオの弟子たちの目を「さえぎって」いたご自分の手を取り除き、その後、十一人の弟子たちの「悟り」を「開いて」、彼らが十分に「聖書を理解する」ことができるようにされたとき、主は、失望から立ち返り、ラオデキヤ的な状態を悔い改め、「真理」を受け入れる、「終わりの日」に生きる人々のための約束を記しておられた。「終わりの日」の「慰め主」は、私たちに「すべてのこと」を教えるとともに、私たちに「すべてのことを思い起こさせる」。彼が私たちにすべてを教えながら過去の真理を思い起こさせることと同じくらい重要なのは、また「これから起こる事柄を私たちに示す」ことである。

しかし、私はあなたがたに真実を言う。私が去って行くことは、あなたがたにとって益である。私が去って行かなければ、助け主はあなたがたのもとに来ない。しかし私が去って行けば、私は彼をあなたがたのもとに遣わす。彼が来ると、罪と義とさばきについて、世にその誤りを明らかにする。罪については、彼らが私を信じないからである。義については、私が父のもとに行き、あなたがたはもはや私を見ないからである。さばきについては、この世の君がさばかれたからである。まだあなたがたに言うべきことが多くあるが、今はそれに耐えられない。しかし、真理の御霊が来るとき、彼はあなたがたをすべての真理へと導く。彼は自分から語るのではなく、聞いたことを語り、やがて起こることをあなたがたに知らせる。彼は私の栄光を現す。彼は私のものを受け、それをあなたがたに知らせるからである。ヨハネによる福音書 16章7-14節。

このとき慰め主は、私たちに「真理」へと「導き」、さらに「来たるべき事柄」を含む「すべてのこと」を「教え」てくださる。というのも、この時点でもなお、イエスは私たちに「まだ語るべき多くのこと」をお持ちだからである。これらの事柄-それが私たちの「記憶」に属する事柄であれ、「来たるべき事柄」であれ、あるいは彼が私たちに「なお」語ろうとしておられる多くの「事柄」であれ-こそが、やがて来る危機に備えて私た

ちに印を押すのである。そうなるのは、彼の真理が彼の創造の力を表しているからである。彼は、到来する危機に先立って私たちに印を押す。なぜなら、聖なる歴史の中でかつてない、御自分の民に対する最大の迫害の時期について、私たちがあらかじめ警告を受けることを意図しておられるからである。その迫害は、過去に私たちが語り行った言葉や行為が記憶され、キリストの言葉が彼に対してねじ曲げられたのと同様に、私たちに不利に用いられることを、具体的に示している。それでもなお、私たちは、エゼキエルとキリストにおいて示されたように、彼らの反逆に対する証として、そのメッセージを宣べ伝えなければならない。

私があなたがたに言った言葉を思い起こしなさい。「しもべはその主人にまさるものではない。」彼らがわたしを迫害したなら、彼らはあなたがたもまた迫害するであろう。もし彼らがわたしの言葉を守ったなら、彼らはあなたがたの言葉も守るであろう。しかし彼らがあなたがたにこれらすべてのことをするのは、わたしの名のゆえであって、わたしを遣わされた方を彼らが知らないからである。もしわたしが来て彼らに語らなかつたなら、彼らに罪はなかつたであろう。しかし今や、彼らには自分の罪について弁解の余地がない。わたしを憎む者は、わたしの父をも憎む。もしわたしが彼らの中で、ほかの誰も行わなかつたわざを行わなかつたなら、彼らに罪はなかつたであろう。しかし今や、彼らはそのわざを見て、わたしとわたしの父をともに憎んだ。しかし、彼らの律法に書かれている「彼らは理由もなくわたしを憎んだ」という言葉が成就するために、このことが起こったのである。しかし、助け主が来るとき、すなわち、わたしが父のもとからあなたがたに遣わす真理の御霊、父から出るその方が、わたしについて証しするであろう。ヨハネ 15:20-26。

「慰め主」である「真理の御霊」は、「真理」であるキリストについて証しする。そしてその「真理」はアルファでありオメガ、最初であり最後、初めであり終わりである。今、封印が解かれつつある七つの雷の隠された歴史は、十四万四千人を封印するメッセージである。2020年7月18日の余波の中で、エレミヤは、まず私たちを愛してくださった方のもとへ立ち返ることを私たちが選ぶよう、模範を示している。その立ち返りの業を成し遂げるにあたり、私たちには尊いものと卑しいものをより分ける責任がある。もし私たちが恐れおののきつつ自分の救いの達成に努め、その業を成し遂げるなら、私たちは封印され、直ちに地上の歴史上最大の危機に入ることになる。また、預言者たち、王たち、そして義人たちが見ることを望んできた歴史を体験する特権にもあずかることになる。

その働きを担って戻ってくる者たちは「神の御座から出る光の中を歩む」ことになり、また「御使いたちを通して天と地の間には絶えず伝達がある」のであり、これは『黙示録』の冒頭の節で示されている伝達の過程である。

この世のすべての人が、神に背いて敵の側に付いたわけではない。すべての人が不忠実になったわけではない。神に対して真実で忠実な者たちが、わずかながらいる。なぜなら、ヨハネはこう書いているからである。「ここに、神の戒めを守り、イエスの信仰を守る者たちがいる。」黙示録14章12節。やがて、神に仕える者と仕えない者との間で、激しい戦いが繰り広げられる。やがて、揺るがされ得るものはすべて揺るがされ、揺るがされないものが残るようになる。

サタンは熱心な聖書研究者である。彼は自分の時間が短いことを知っており、この地における主のみわざをあらゆる面で妨げようとしている。天の栄光と過去の迫害の再来が入り混じるとき、地上に生きる神の民がどのような経験をするかを言い表すことは不可能である。彼らは神の御座から発する光のうちを歩む。御使いたちを通して、天と地の間には絶え間ない交わりがある。そしてサタンは悪しき天使たちに囲まれ、自らを神であると主張し、できれば選ばれた者たちでさえ惑わそうとして、あらゆる種類の奇跡を行う。神の民は奇跡を行うことに自分たちの安全を見いだすことはない。というのも、行われる奇跡をサタンが模倣するからである。試みられ、練られた神の民は、出エジプト記31章12節から18節に語られているしるしのうちに自らの力を見いだす。彼らは「書いてある」という生ける御言葉の上に立たなければならない。これこそが、彼らが確かに立つことのできる唯一の土台である。神との契約を破った者たちは、その日、神も希望も持たない者となる。

神の礼拝者たちは、第四戒を重んじることによって、ひととき明確に区別される。というのも、それは神の創造の権能のしるしであり、人間の畏敬と礼拝に対する神のご要求を証しするものだからである。悪しき者たちは、創造主の記念を取り壊し、ローマの制度を高く掲げようとする努力によって区別される。この闘争の結末において、全キリスト教界は二つの大きな陣営に分かれる。すなわち、神の戒めとイエスの信仰を守る者たちと、獣とその像を拝み、その刻印を受ける者たちである。たとえ教会と国家が力を合わせ、「小さい者も大きい者も、富む者も貧しい者も、自由人も奴隷も」に獣の刻印を受けさせようと強制しても、神の民はそれを受けない。黙示録 13章16節。パトモスの預言者は、「獣とその像とその刻印とその名の数に打ち勝った者たちが、神の琴を持ってガラスの海の上に立ち」、モーセと小羊の歌を歌っているのを見た。黙示録 15章2節。

「神の民には恐るべき試練と苦難が待ち受けている。戦争の精神が、地の一端から他端に至るまで諸国民をかき立てている。しかし、来ようとしている苦難の時——国が存在して以来かつてなかったような苦難の時——のただ中であっても、神の選民は揺るがずに立つ。サタンとその軍勢は彼らを滅ぼすことができない。力においてすぐれた御使いたちが彼らを守るからである。」証言 第9巻 15-17。

この箇所は『Testimonies』第九巻の11ページから始まる章の結びであり、それが9・11を表していると理解できることを知っておく価値がある。題が来る花婿についてであること、また、パウロが『ヘブライ人への手紙』に記した節をそこから導き出したハバククの図表にも注目する価値がある。章の冒頭は、2001年9月11日に始まった歴史、アドベンチズムの初めに結ばれた預言の契約の二つの表、そして題が「最後の危機」であり、それが最後の真夜中の叫びを指し示していることを示している。章の結びは冒頭と完全に一致している。というのも、冒頭も結びも最終的な危機を扱っているからである。

第1節 王の到来のために

「もうしばらくすれば、来るべき方が来られ、遅れることはない。」ヘブル人への手紙 10章37節

最後の危機

「私たちは終わりの時代に生きている。時のしるしが次々と成就し、キリストの再臨が間近に迫っていることを告げている。私たちが生きるこの日々は厳粛で重要である。神の霊は徐々に、しかし確実に地上から取り去られつつある。神の恵みを侮る者たちの上に、疫病と裁きがすでに下っている。陸と海における災害、社会の不安定な状態、戦争の警鐘は、不吉な前兆である。それらは、この上なく重大な出来事が近づいていることを予告している。」『証言』第9巻、11。

もし私たちが立ち返り、エレミヤに示されているように神の「口」となるという崇高な召しを受け入れるなら、私たちは間もなく、聖なる歴史における最大の収穫にあずかることになるでしょう。

彼はまた、彼らに希望と勇気の言葉を語った。「心を騒がせてはならない」と彼は言われた。「あなたがたは神を信じている。わたしをも信じなさい。わたしの父の家には多くの住まいがある。もしそうでなかったなら、そのように伝えておいたはずだ。わたしは、あなたがたのために場所を備えに行く。わたしが行ってあなたがたのために場所を備えたなら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。わたしのいるところに、あなたがたもいられるようにする。わたしがどこへ行くのか、その行き先も道も、あなたがたは知っている。」ヨハネによる福音書14章1-4節。あなたがたのために、わたしは世に来た。あなたがたのために働いてきた。わたしが去っても、なおあなたがたのために熱心に働く。あなたがたが信じるようになるために、わたしは自らをあなたがたに示すために世に来た。わたしは、わたしの父でありあなたがたの父でもある方のもとへ行き、あなたがたに代わって、その方と共に働く。

「まことに、まことに、あなたがたに言う。わたしを信じる者は、わたしのしているわざをも行い、これらよりも大きなわざを行う。わたしが父のもとへ行くからである。」ヨハネ14:12。これによって、キリストが意味したのは、弟子たちがご自身のなされたことよりも高尚な努力をするということではなく、彼らの働きがより大きな規模に及ぶということであった。彼は単に奇跡を行うことだけを指したのではなく、聖霊の働きを通して起こるすべてのことを含めて語られた。「助け主が来るとき」と彼は言われた。「すなわち、わたしが父からあなたがたに遣わす真理の霊、父から出て来るその方が、わたしについて証しする。あなたがたもまた、初めからわたしと共にいたので、証しをする。」ヨハネ15:26、27。

これらの言葉は驚くべきしかたで成就した。聖霊が降られた後、弟子たちは主ご自身への愛と、主がそのために死なれた人々への愛に満たされるあまり、彼らの語る言葉とささげる祈りによって人々の心は溶かされた。彼らは聖霊の力によって語り、その力の働きのもとで、何千人もが回心した。『使徒行伝』21、22。